



Title	日本語母語話者の騒音場面における改善要求：親疎関係に注目して
Author(s)	天野, 景子
Citation	日本語・日本文化研究. 2013, 23, p. 142-153
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26926
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語母語話者の騒音場面における改善要求 —親疎関係に注目して—

天野 景子

1. はじめに

他者の行為により不利益を得たり不満を感じたりした時、私たちはそれを相手に伝えるべきか、また伝えるのであればどのように伝えればよいのか迷うことがある。このような場面での相手の行為を中止、改善させようとする言語行動を本稿では「改善要求」と呼ぶが、相手との関係性を良好に保ちつつ、効果的に改善要求を行うために、私たちはどのような点に気を付けているのだろうか。また、相手との関係性により私たちは無意識に伝え方を変えていると考えられるが、実際に何をどのように変えているのだろうか。日本語母語話者が持つこのようなある種の規範を明らかにすることは、それぞれの言語、文化で異なる規範を持つであろう日本語学習者にとっても、日本語母語話者との円滑なコミュニケーションのために有益であると考えられる。

本稿では日本語母語話者を対象に行ったロールプレイを基に、騒音場面で日本語母語話者が異なる親疎関係の相手に対し、どのように改善要求を行っているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

2. 1 定義

相手から何らかの不利益を受けた時に行う言語行動の名称には「改善要求」(牧原 2008 ほか)、「不満表明」(初鹿野・熊取谷・藤森 1996 他)、「苦情」(小林 2004)といったものがあるが、その定義するところは先行研究により様々である。本稿では相手に不満を伝えるだけではなく、相手の行動を中止、改善させようとすることに目的を置いた言語行動を扱うこととし、「改善要求」という名称を採用する。また、その定義を以下のように定める。

改善要求：話し手 (S) が聞き手 (H) から現在不利益を受けており、H がその行為を中止／改善できるという S の見込みがある場合に S が H の行為を中止、あるいは改善させようとする行為

改善要求の言語行動として発話によるものと非言語行動によるものとがあげられるが、特に断りのない限り本稿での改善要求は発話によるものとする。なお、1) H の不利益付与行為がもはや中止あるいは改善できないもの、2) S が不利益を受けない状態での H への行為の中止や改善求めは本稿では「改善要求」として扱わない。

2. 2 本研究の位置づけ

これまでの日本語における改善要求や不満表明に関する先行研究では、日本語における改善要求のストラテジー（初鹿野・熊取谷・藤森 1996、牧原 2008）、改善要求の発話で用いられる文機能ⁱ（山岡 2008）、また改善要求選択に影響を与える要因（郭 2007）等が明らかになっている。しかしながら、親疎関係や上下関係といった要因の違いによって、それぞれの相手に対して使用されるストラテジーや文機能がどのように異なるのか、「使い分け」という観点から詳しく調査したものは管見の限り見られない。

改善要求の言語行動に大きく影響を与える要素のひとつとして上述の通り親疎関係があげられるが、本稿では、家族、親友、クラスメイト、初対面の相手という 4 種類の親しさの程度が異なる相手に対する改善要求行動にどのような異なりがみられるかを明らかにすることを目的とするⁱⁱ。

3. 調査概要

3. 1 調査協力者と調査期間

調査は 2011 年 5 月に関西圏の大学に通う 18 歳～22 歳の女子学生で、普段から仲の良い友人同士二人ずつ 8 組、計 16 名に対して行った。調査協力者はほぼ全員が関西圏（兵庫、大阪、京都、奈良）の出身である。

3. 2 データ収集の方法

調査はロールプレイ形式で行った。調査協力者 S にはロールカード A を渡し、実際にそのような場面に遭遇した場合、調査協力者 H に対してどのような行動をとるか、またはとらないか、を再現するよう指示した。なおロールカードは相手の親疎関係を変えた 4 種類を使用した。調査協力者 H に対しては自分が不利益を与えているとはわからないような書かれ方をした同場面のロールカード B を渡し、S から働きかけがあった場合にのみ応答をするよう指示した。会話は IC レコーダーで録音し、文字化を行ったⁱⁱⁱ。なお、ロールプレイ終了後、調査者が調査協力者に口頭でインタビューを行った。

3. 3 場面および要素の設定

今回の調査では調査協力者が日常よく遭遇しそうな場面として「騒音場面」を設定した。なお、各ロールプレイの条件を統一するために、相手は同性の同年代の相手と設定し、家族に関しては姉妹を想定してもらった。以下は使用したロールカードの二例であり、クラスメイトに対しては下線部分を「時々話すそれほど親しくないクラスメイト（女性）」、初対面の相手に対しては「あなたと同年代の知らない女の人」としたものをを使用した。また、姉妹に対しての設定は自習室ではなく「リビングで勉強をしているが姉妹が見ているテレビの音が大きくて集中できない」とした^{iv}。

使用したロールカード

ロールカード A (改善要求側 S)

あなたは明日テストがあり、大学の自習室で勉強をしています。同じ部屋には親友(女性)*がいて、少し大きな音で音楽を聞きながら勉強しているので、気になって勉強になかなか集中できません。あなたは、どうしますか。または、何を言いますか。

ロールカード B (改善側 H)

あなたは今大学の自習室で音楽を聞きながら勉強をしています。同じ部屋であなたの親友(女性)*も勉強をしているようです。あなたの親友*があなたに対して何かしてきた時、それに続く行動や会話をしてください。

3. 4 分析の方法

回収されたデータでは改善要求が実行されたものと実行されなかったものが見られたが、改善要求が実行されたデータにおいて、S側の発話は「すみません」、「おはよう」といった、会話をこれから始めるにあたって相手の注意をひきつける【開始部】、感謝や別れの挨拶を述べ会話を終結に向かわせる【終結部】、その間に位置し、改善要求に関わる発話を行う【改善要求部】に分けられた。また、【改善要求部】の発話は、Hに具体的な改善行動を指示するタイプと、Sの感情表出およびHやその場の状況を描写するタイプとの二種類に大きく分けられた。この2分類は山岡(2008)の《改善要求》と間接的《改善要求》という分類に沿うものであり、本稿でもこれらの用語を援用する。ただし、本稿では山岡(2008)では扱われていなかった「使い分け」という観点から論を進めるために、これまでの分類に変更を加え、新たな分類を試みている。

本稿では親疎関係による違いが特に観察できた【改善要求部】に注目し、《改善要求》と間接的《改善要求》のそれぞれにおいてどのような種類の発話が現れたかを確認したうえで、それぞれの親疎間でどのような発話が使用されていたか分析・考察を行う。また、改善要求が実行されなかった場合については、どのような心理が働いたのかをインタビュー結果に基づき考察する。

4. 調査結果と考察

調査の結果、改善要求の実行数と不実行数は以下の通りであった。今回のデータでは改善要求の発話が行われた全ての会話においてHから改善をする旨の返答がみられた。

表 1. 騒音場面での親疎関係別改善要求実行・不実行数

	姉妹	親友	クラスメイト	初対面
改善要求実行	15	15	4	0
改善要求不実行	1	1	12	16
計	16	16	16	16

以下、4.1 では改善要求が行われるかどうか、4.2 では《改善要求》、4.3 では間接的《改善要求》それぞれについてその種類と親疎関係による使い分けについて確認したい。

4. 1 改善要求が行われるかどうか

騒音場面において、姉妹や親友に対してはほぼ全ての場合改善要求が行われていたのに対し、クラスメイト相手に対しては 12/16、初対面の相手に対しては 16/16 という高い割合で改善要求が行われなかった。その理由として S からは「言うことに気が引ける」、「相手がどんな反応をするかわからない」、「知らない人には話しかけられない」、「行動自体が面倒くさい」といった回答が得られた。また改善要求の発話の代わりに取る行動として、「何も言わずに自分が他の場所に移る」、「何も言わずそのままそこにいる」、「自分も音楽を聴いて気を紛らわす」といった相手に何も働きかけないタイプと、「偶然目があったら耳を指さして気付かせる」、「咳払いをする」、「何回か相手を見る」、などと相手に積極的に非言語行動で訴えかけるタイプがあったが、積極的に非言語行動を起こすか否かは親疎関係による差は見られなかった。なお、S が改善要求を行った後、H が「ありがとう」と返答する例が親友相手に 4 例、クラスメイト相手に 2 例見られたが、これに関して H 側の意見を求めたところ、「(S 以外の) 他人にも迷惑をかけていることを指摘してくれたから」「(自分が他の人に対して同様のことを) 言いにくいとわかっているから、あえて(相手が私に) 言ってくれたことに感謝する」といった回答が得られた。

改善要求を行わない理由、また H 側から得られた「言いにくい」といった回答からは、あまりよく知らずどんな反応をするかわからない相手に対して話しかけることに難しさを感じる、という S の意識が窺える。逆の視点から見れば、相手の反応が予想できる場合は改善要求行動を行いやすいということにもつながるだろう。

また代わりに行う行動として自分が他の場所や部屋に移動するという回答が多く見られたが、クラスメイトに対して「もし(H に声をかけないまま) 移動して、移動した先で相手に見つかったらいやらしい」という回答がみられた。ここから、面識のあるクラスメイトに対しては何らかの働きかけをした方がよいという思いを持ちつつも、相手に直接働きかけを行うのは難しい、「した方がいいが、どのようにしていいかわからない」という H の意識が窺える。

他に用いられた「指で耳を指す」、「咳払いをする」、「相手を見る」といったストラテジ

一はうまく相手に意図が伝われば改善の見込める非言語行動だと言えるだろう。

4. 2 《改善要求》における親疎による表現の異なり

次に、改善要求が行われた場合の【改善要求部】のうち、《改善要求》のグループについて確認したい。《改善要求》とは H に具体的な改善行動を指示するなどの形式で改善要求を行うものであり、山岡（2008）は「広義の《依頼》の一種とも言え」、「《依頼》と同じ文機能によって表現することができる」としている（pp.92-93）^{vi}。今回のデータでは、《改善要求》のグループは改善要求が行われなかった初対面の相手を除く全ての親疎関係で見られた。

表 2 は騒音場面に表れた《改善要求》の文機能とその形態に注目した分類表である。

表 2. 騒音場面における《改善要求》の分類

	文機能と形態例	発話例
1	<命令> ^{vii} V て	音小さくして
2	<助言> ^{viii} V たほうがいい	ちっちゃくした方がいい
3	<依頼：クレル系> ^{ix} V てくれる、V てくれへん（くれない）	音楽止めてくれる 小さくしてくれん
4	<依頼：モラウ系> V てもらえる、V もらっていい	小さくしてもらえないかな 小さくしてもらってもいい
5	<願望表出> V てほしい	できれば音量上げてほしい

以下、具体的にどのような発話が現れたかを見ていきたい。

【例 1 対 姉妹】<命令>

S1：お姉ちゃん、ちょっと音ちっちゃくして。（以下略）

【例 2 対 親友】<助言>

S1：あのさー、ちょっと音楽漏れてるよ。（中略）ちっちゃくした方がいい。

姉妹や親友に対する回答【例 1】、【例 2】では、<命令>や<助言>の形式を使い H に S から一方的に要求を通達し指示を与えているような印象を受ける。一方で、【例 3】のようなく依頼>の形式をとった改善要求も見られた。

【例 3 対 親友】＜依頼＞

S1：ねえ H ちゃん。(中略) 若干小さくしてもらってもいい？若干でいいんやけど。

次の 2 例は同一の調査協力者から得られた回答である。

【例 4 対 親友】＜依頼＞

S1：(省略)あの一、今音楽きいてるやんな。(中略)ちょっと静かに、音下げてくれる？

【例 5 対 クラスメイト】＜願望表出＞

S1：えっとー、音楽かけてる一、やんな。(中略)で、できればちょっと音量下げてほしい。

【例 4】と【例 5】を比較すると、クラスメイトに対しては語尾の引き延ばしや「で、できれば」といった躊躇の現れからも若干の遠慮がうかがえるが、相手に対して積極的に働きかける＜依頼＞の形式の使用と S 自身の願望を述べる＜願望表出＞の使用という点で両者への改善要求の方法が異なっていることが分かる。

《改善要求》の発話を表 2 の分類に沿って分け、その使用数を親疎別に並べたものが表 3 である。

表 3. 《改善要求》の親疎関係別使用範囲と使用数（併用使用あり）

文機能	姉妹	親友	クラスメイト	初対面の相手
＜命令＞	8	0	0	0
＜依頼：クレル系＞	4	1	0	0
＜助言＞	2	1	0	0
＜依頼：モラウ系＞	0	3	0	0
＜願望表出＞	0	0	2	0
(行為指示の不使用)	2	12	14	16

姉妹・親友に対しては、＜依頼：クレル系＞、＜助言＞等が共通して使用されている一方、クラスメイトには＜願望表出＞を用いるに留まっていることが分かる。

姉妹や親友に対して用いられる＜命令＞は H に決定権を与えないような一方的な発話であり、また＜依頼＞のグループは質問という形態をとっているため H に返答しなければいけないという若干の心理的負担をかける発話であると言える。一方で、＜願望表出＞の形式では H の返答の義務は形態上ないと言ってもよい。すなわち＜願望表出＞を使用する

ことは、＜命令＞、＜依頼＞に比べて H に与える心理的負担を低くすることにつながると考えられる。さらに、親しい関係性の相手に対してはこれまでの関係性から「何らかの返答が返ってくるだろう」という期待があり、返答を求める形式を使用しやすいが、関係性の確立されていない相手に対しては相手がどのような反応をするか分からないために、押しつけがましくない形式を選択したのではないかと考えられる。

次に＜助言＞に注目すると、H に返答の義務を求める形態ではないが、使われる相手を見ると姉妹や親友といった親しい相手に限られている。＜願望表出＞はあくまで S の心的状況の表出であるが、＜助言＞は＜命令＞にも似た H への積極的で一方的な働きかけであるためだと推測できる。

以上より、親しい相手に対しては一方的な働きかけの形態や返答を求める形式を使用し、関係性の遠い相手に対してはより相手に心理的負担をかけず、相手が決定権をもてるような形式が用いられる傾向があると言える。

4. 3 間接的《改善要求》における親疎による表現の異なり

次に【改善要求部】の間接的《改善要求》について、まずその種類を確認していきたい。間接的《改善要求》には S の感情表出や H、またはその場の状態の描写が含まれるが、騒音場面では表 4 にあげる 6 種類が確認できた^{xi}。

表 4. 騒音場面における間接的《改善要求》の分類

	発話の種類・内容	例（回答より）
1	<u>＜状態描写—マイナス評価語^{xii}＞</u> 良い、悪い、きれい、汚い等の評価性を持つ語のうち、S の否定的な感情や評価を表す語（形容詞）を使用して状態を描写する。	うるさいんだけど。
2	<u>＜状態描写—臨時的マイナス評価語＞</u> 本義的なマイナス評価語ではないが、評価の社会的な認知度（焼きつけられ度）が高い、または文脈、状況の添加により臨時的にマイナスよりの評価がくみ取れる語（形容詞、名詞など）で状態を描写する。	音漏れしてるよ 大きすぎ
3	<u>＜状態描写—中立語彙・表現＞</u> マイナス評価語や臨時的マイナス評価語などを用いず、中立に近い語や表現で状態を描写する。	こっちにも聞こえてくる。 周りにも聞こえてると思う。 音楽かけてるやんな。
4	<u>＜S の不利益の告知＞</u> S が受けている不利益を S の主観的立場から描写する。	勉強に集中できない。 気になる。

5	<u>＜拘束力を持つ事実の提示＞</u> 社会的ルールを暗示するような事実を述べることで、H にルール違反を気づかせるきっかけとする。	ここ自習室やで
6	<u>＜H への行動・状態の明確化要求＞</u> 質問などをして H の現在の行動や状態を改めて認識させ、それがその場の状況にそぐわないことを気づかせるきっかけとする。	何聞ってるん？

間接的《改善要求》によって改善要求を行う場合にも、《改善要求》と同じく異なる親しさの相手に対して用いられる発話の種類が異なる様子が確認できた。【例 5】【例 6】は同じ調査協力者の回答である。なお、以下発話の種類は表 4 中太字となっている箇所のみ示す。

【例 5 対 親友】＜S の不利益の告知＞

S1：H ちゃんごめん、ちょっと今いい、あの一、今音楽聴いてるやんな。(中略)それがちょっと聞こえて勉強に集中できへんから、ちょっと静かに、音下げしてくれる。(以下略)

【例 6 対 クラスメイト】＜中立表現・語彙＞

S1：(省略) えっと一、音楽かけてる一やんな。(中略) それが一、ちょっと一、こっちにも聞こえてくるから、で、できればちょっと音量下げしてほしい。(以下略)

どちらの場合も理由として状態描写をしてから「音を下げて」と H に具体的な行動を指示、あるいは依頼している点では同じである。しかしながら理由として述べられた部分には違いがみられる。親友に対する改善要求【例 5】では、「集中できへんから」と＜S の不利益の告知＞を使用することで不満の気持ちを前面に押し出しているのに対し、クラスメイトに対しては S の感じている不利益をそのまま伝えるのではなく、「こっちにも聞こえてくるから」と＜中立語彙・表現＞で状態を描写するにとどめており、S の感情は見えにくくなっている。

では、親友よりさらに親しい家族に対してはどのような間接的《改善要求》が現れるのだろうか。【例 7】は状況は異なるが、同じ被調査協力者の姉妹に対する回答である。

【例 7 対 姉妹】＜マイナス評価語＞

S1：ごめちょっとテレビうるさいんやけど。(以下略)

【例7】では、「うるさい」という＜マイナス評価語＞を用いて、Sが不利益を受けていることをはっきりと明示している

表5は親疎関係ごとの間接的《改善要求》の使用数を種類別に見たものである。

表5. 間接的《改善要求》の親疎関係別使用範囲と使用数（併用使用あり）

発話の種類・内容	姉妹	親友	クラスメイト	初対面の相手
＜マイナス評価語＞	5	2	0	0
＜Sの不利益の告知＞	3	4	0	0
＜臨時的マイナス評価語＞	3	6	2	0
＜中立語彙・表現＞	0	3	2	0
＜拘束力＞	0	1	0	0
＜Hへの明確化要求＞	0	0	2	0
（状態描写の不使用）	5	3	12	16

上の表から、親疎関係の異なる相手に対して間接的《改善要求》で改善要求を行う際のある傾向が窺える。姉妹に対しては＜マイナス評価語＞、＜Sの不利益の告知＞といった、Sが事態を否定的に捉えており、不利益を感じているということが明らかに分かるような発話が積極的に使用されている。一方、クラスメイトに対しては＜臨時的マイナス評価語＞の使用も見られたものの、＜中立語彙・表現＞や＜Hへの明確化要求＞といった、状況・文脈の助けがなければSが不利益を被っているとははっきりと判断できない形式が用いられている。Sの否定的な感情や評価は表れにくく、Sは自分が不利益を被っている立場だと積極的に表明することを避けているようである。親友に対してはその間をとって様々なバリエーションの発話が用いられている。

以上を総合すると、親しい相手に対しては事態に対しての否定的な評価や否定的な感情を明示的に表すことで、自らが不利益を被っていることを積極的に表明するが、関係性が遠くなるにつれ事態に対して自分の主観的な評価や感情を見せずに、事実を客観的あるいは中立的に述べようとする傾向があるということがわかる。親しい相手に対しては負の感情をそのまま表現する傾向があるのに対し、関係性の遠い相手に対しては負の感情を中立な表現に変換しようと努めているかのようなようである。負の感情の直接的な表出はその後の諍いを招く恐れがあるが、関係性が既に確立されている親しい相手に対してはその点をあまり気にせずに改善要求を行い、関係性の不安定な相手に対しては諍いの危険性をできる限り避けようと負の感情の見えにくい言葉を選んでいるのではないかと考えられる。

5. まとめ

以上、本調査では騒音場面での改善要求行動について次のような傾向が確認できた。

1. 改善要求の実行・不実行に関しては、親疎関係が遠くなるにつれて、改善要求を行うことにためらいが見られ、改善要求が行われなくなるようになる。関係性の遠い相手に対しては相手がどのような反応をするかわからないため言いにくい、といった心理が働いていると考えられる。
2. 相手に具体的な改善行動を指示する等の形式を用いる《改善要求》によって改善要求をする際、相手との関係性が遠くなるにつれ、決定権を自分から相手へと譲渡していく、また相手に積極的な返答を求めないような形式を選択していく傾向がみられる。具体的には、＜命令＞（例：音ちっちゃくして）、＜依頼：クレル系＞（例：ちっちゃくしてくれる）、＜助言＞（例：音ちっちゃくした方がいい）、＜依頼：モラウ系＞（例：小さくしてもらってもいい）、＜願望表出＞（例：音下げてほしい）という順で、関係性が近い相手から遠い相手へと形式を選択していく。
3. 自分の感情の表出や、相手、もしくはその場の状態の描写によって改善要求を行う間接的《改善要求》によって改善要求を行う場合、相手との関係性が遠くなるにつれ、話者の事態に対する否定的な感情や評価を明示しないような表現を選択していくという傾向がみられる。具体的には＜マイナス評価語＞（例：うるさい）、＜Sの不利益の告知＞（例：勉強に集中できない）、＜臨時的マイナス評価語＞（例：大きすぎ）、＜中立語彙・表現＞（例：こっちにも聞こえてくる）、＜拘束力をもつ事実の提示＞（例：ここ自習室やで）、＜H への行動・状態の明確化要求＞（例：なにしてるん？）という順で、関係性が近い相手から遠い相手へと形式を選択していく。

本調査では調査協力者数や設定場面が限られているため、一般的な傾向を明らかにできたということとはできないが、日本語母語話者が改善要求をする際に親疎関係の異なりによって表現を使い分けているという傾向を確認することができた。今後の課題として、さらに設定場面と調査数を増やし、今回得られた結果の信頼性を高めること、《改善要求》と間接的《改善要求》の組み合わせからみた傾向を見ることなどがあげられる。また、日本語指導場面に生かせるよう、外国語学習者に対してわかりやすい形で提示することも求められる。

【参考文献】

- 蒲谷宏 (2013) 『待遇コミュニケーション論』 大修館書店
- 小林真由美 (2004) 「苦情表現のストラテジー」『葛野』8号 京都外国語大学 pp.1-15
- 田中里美 (1993) 「ことばの評価性」大阪外国語大学日本語講座『日本語・日本文化研究』第3号 一心社 pp.121-133

- 郭碧蘭(2007)「日本語の不満表明ストラテジーに影響を及ぼす要因—社会的・文化的観点から—」『明海日本語』第12号 pp.51-59
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子(1996)「不満表明ストラテジーの使用傾向—日本語母語話者と日本語学習者の比較」『日本語教育』88号 pp.79-90
- 牧原功(2008)「不満表明・改善要求における配慮行動」『群馬大学留学生センター論集』第7号 pp.51-60
- 三宅和子(1995)「日本人の言語行動パターン—ウチ・ソト・ヨソ意識—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第9号
- 山岡政紀(2008)『発話機能論』くろしお出版
- Brown, P. and S. Levinson. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press. 1987

-
- i 文機能とは談話レベルではなく文単位の機能を指す。詳しくは山岡(2008)を参照されたい。なお、本稿では山岡(2008)に倣い、文機能を<>で、その上位区分となる発話機能を《》で表示する。
- ii 三宅(1995)は従来のウチ・ソトモデルに対してヨソを含めた3分類モデルを提唱している。それによれば、ウチの人間とは「自己のまわりの家族やごく親しい人々」、ソトの人間とは「ごく親しくはないが自己やウチと関連のある人々」、ヨソの人間とは「自己やウチとは関係がないがなにかのきっかけで関係をもちえる人々」と分けられる。筆者はそこからさらに家庭内と家庭の外でも違いがみられるのではないかという母語話者としての内省から4段階の親疎関係での調査を試みた。ただし、それぞれの親疎関係に対して持つイメージが個人で異なる可能性があるという点は否めないため、調査時に調査協力者にインタビュー等でイメージのすり合わせを行った。その結果、調査協力者間でそれぞれの関係性に対して持つイメージの大きな差がないことを確認した。
- iii なお、文字化に際して使用した記号は以下の通りである。
- 。: 下降調の文の終わり
- 、: 短い沈黙
- : 直前の音節一拍分のばして発音がされている
- ? : 上昇イントネーション
- iv 姉妹と学校の自習室で一緒にいると言う場面はあまり現実的ではないと判断し、設定をより現実に近い「家の中での騒音場面」とした。なお、自習室と家のリビング、という設定の異なりによって生じる「周囲の人間の有無」、「縄張り意識の大小」「部屋の目的」などの違いが改善要求表現選択に影響を与える可能性も否めない。姉妹で改善要求が行われなかった一例についてインタビューしたところ、「家のリビングは誰が何をしても自由なので」という理由から、絶対に我慢できないような騒音でない限りは自分が静かな部屋に移動するという回答がみられた。しかしながら同じ空間を共有して使うという点で大きな差は見られないと判断し、今回この二つの場面を採用した。
- v 《改善要求》と間接的《改善要求》は、一つのデータにおいてどちらか一方のみが使用された場合と併

用使用された場合とが確認できたが、その使用傾向については別稿に譲りたい。

- vi 山岡（2008）の《依頼》の文機能は＜遂行＞、＜命令＞、＜意思要求＞、＜意思誘導＞、＜可能要求＞、＜許可要求＞、＜願望表出＞、＜感情表出＞であり、《改善要求》はさらに否定命題の＜命令＞、＜否定当為＞、＜願望表出＞を加えたものである。
- vii 「Vて」、「Vてくれる」、「Vてもらう」等は行為指示型の発話であり、「Vて」を単純に命令として分けることには問題があるが、便宜上＜命令＞、＜依頼：クレル系＞、＜依頼：モラウ系＞とする。
- viii ＜助言＞は山岡（2008）においては《改善要求》の分類には含まれていない。
- ix 本稿では山岡（2008）の＜意志要求＞、＜意志誘導＞をまとめて＜依頼：クレル系＞、＜可能要求＞、＜許可要求＞をまとめて＜依頼：モラウ系＞としている。クレル・モラウについて蒲谷（2013）は『「シテクレマスカ」は「シテモラエマスカ」にすることで、行動主体を「相手」からあたかも（なにかを）してもらう「自分」であるかのように言い換えることができる。それにより「シテモラエマスカ」は「シテクレマスカ」と比較してより丁寧な表現となっている』という趣旨のことを述べている。詳しくは pp.248-249 を参照されたい。
- x 蒲谷（2013）では「相手に決定権を与える構造を持つ行為が原理的に丁寧なものになる」と述べている。詳しくは pp.233-238 を参照のこと。
- xi 山岡（2008）における間接的《改善要求》の分類は＜感情表出＞と＜状態描写＞の二種となっているが、本稿ではSの感情表出の度合いや事態に対する評価の表出度合いという観点から再分類を行った。
- xii 田中（1993）は、単語について「自身の中にプラスかマイナスの意義を本来備え持っているような語と、本来はそのいずれの意義もになっていない語、すなわち中立的な語とに分けられる」とし、前者を「本義的に評価性を持つもの」、後者を「外的な要因によるもの」としている。本稿では、「本義的に評価性をもつ」単語のうち、マイナスの意義を持っている単語を特に「マイナス評価語」と呼ぶことにする。